

目 次

発刊にあたって 医療法人・神戸健康共和会理事長 浦井 洋

1. 大災害時の医療連携をふりかえって	4
[1] 大災害におけるの病院連携について 国立明石病院 現場責任者	4
[2] 東灘保健所での医療コーディネイター活動 神戸市立中央市民病院 石原享介	6
[3] 震災時の連携の中で 神戸市東灘消防署救急係長 菅原隆喜	8
[4] 阪神大震災の残したもの 神戸市中央区・シラハ病院院長 白羽 誠	10
[5] 被災地に最も近接した西淀川から支援して 西淀病院院長 大野啓文	12
[6] 東神戸病院の震災時の医療活動に寄せて 耳原総合病院内科部長 白井俊由	14
2. 震災の真ん中から（被災地からの提言）－震災で起こった事実を教訓に－	15
[1] 震災死の分析より－震災は誰の生命をどう奪ったのか－	15
神戸大学名誉教授・早川和男先生の報告	18
[2] 震災初期の救助・医療のありかたについて	21
大阪府立病院 主幹兼救急診療科医長・山吉 滋先生の報告	23
[3] 二次災害犠牲者と街づくり	27
立命館大学教授・宮本憲一先生の報告	31
3. 震災時医療のその後	33
[1] 震災から6ヵ月がすぎて	33
[2] 疾患各論	36
① 血気胸	36
② 呼吸器疾患（血気胸をのぞく）	38
③ 心不全	40
④ 脳血管障害	43



⑤ 消化管出血	45
⑥ DOA 搬入時「心肺停止例」	48
⑦ 精神疾患	50
⑧ 交通事故	57
4. 救命の中の絆—震災時の看護をふりかえる—	58
[1] 看護活動の特徴	58
[2] 看護婦の心のケア	63
[3] 震災から学んだこと	66
5. 被災者のその時、そして今	67
[1] 患者の姿にみる神戸	67
[2] 座談会—地域の人と手を携えて	74
6. 引き継がれる地域活動とボランティア	81
[1] 震災後の地域訪問活動	81
[2] 学生ボランティア	91
① 医系学生ボランティア活動を通して	91
② 学生ボランティア感想より	94
7. 今後に生かす支援のあり方	97
[1] 人的支援	97
[2] 物的支援	102
8. 心ひとつに—支援者の感想から—	106
9. 震災の真ん中で—職員の手記より—	111
おわりに	119

発刊にあたって

医療法人

神戸健康共和会理事長 浦井 洋

1月17日未明、阪神・淡路地方を襲った大都市直下型地震は、神戸に、戦後最悪かつ最大の人的物的被害をもたらした。

東灘区・灘区・中央区に位置する神戸健康共和会各院所も物心両面でかつてなく大きなダメージを受けた。

しかし、全日本民医連の迅速かつ大規模な支援の下、各院所は、ほぼ地震発生直後から診療を始め、まさに超人的な「民医連医療」を展開し続けて今日に至っている。

その烈しい活動の一端は、既に本年3月「震災の真ん中で」という記録集にまとめられ、市販もされて、様々な反響をよんでいる。

しかし1月17日から約半年を経た今日、現地の状態はどうか、相変わらず空き地には被災者のテントがあり、青いビニールに覆われた家屋の中で市民は生活し、学校・公共施設には被災者が存在し続けている。当然、市民の健康は悪化し、自殺者も増え、事故死が多発している。まさに人権問題である。

ところが、中央政府の「復旧復興は自立自助で」という原則は、末端自治体まで貫かれ、多くのマスコミからは「阪神大震災」の文字は消え、日本国民にとって「阪神大震災」はローカルな問題、

過去の問題になろうとしている。悲しいことである。

そこで、神戸健康共和会記録集編集委員会は改めて、1月17日から半年間の「阪神大震災」を、様々な角度から記録し、分析し、これを編集して「震災の真ん中で」の続報を世に問うことにした。識者の皆さんの御批判を賜れば幸いである。

ちなみに、1971年に制定された東京都の震災予防条例の前文に「地震は自然現象であるが、地震による災害の多くは人災」だとある。残念ながらわが神戸市には、こういう認識がない。ないどころか震災予防条例さえもないのである（災害一般の対策の中に地震もその1つとして含まれている）。

だから私は、市当局や市会議員の皆さんに申し上げたい。

「地震は天災だが、震災は人災だ」という認識をもって、「従来のお役所仕事の延長線上ではなく、被災者の期待にこたえうる血のかよった行政」を要望しておきたい。

最後に、私は、共和会職員の皆さん、支援をいただいた全日本民医連の職員の皆さんとボランティアの方々、出先で市民の批判を浴びながらも、四苦八苦努力しておられる自治体職員の方々に、心から敬意を表しておきたい。